

地域に飛び出す

役所の論理を振りかざしたところで、市民は動かない。そんな当たり前のことがわからない自治体職員は、まだまだ多い。その原因

との映画「感〜After the rain」が転機となった。数人で始めたプロジェクトは大きなうねりとなり、仲間集め、協賛集め、借物の手配…。商業映画ではお金で解決することを地道にクリアしていった。

レンジしている。

今回は、こうした経験から学んだ七つのことを挙げてみたい。

その1「弱みは強み」

自治体職員の器用さが、関わりしるを奪う。自己完結せず、人に委ね、巻き込むことがプロジェクトの価値を増大させると心得よ。

その2「参加と参画のはざま」

お客さんから当事者へシフトさせる難しさよ。参加になく参画にある苦労と工夫の「く」を共有する余白のデザインから始めよ。

その3「速さは最大の付加価値」

とかく行政は、完璧に計画してから始めようとする。小さく始め、トライ&エラーを繰り返すべし。

その4「衝突を恐れるな」

対話を意識するあまり、忖度のキャッチボールで満足しがち。時にドッジボールも厭わない覚悟が本音で語れる関係性を紡ぐ。

その5「制約を楽しめ」

制約があるからこそ自由な発想ができる。なんでも自由な提案をという枠組みで斬新なアイデアが生れた試し無し。地域の限られた資源のなかで成果を出すべし。

その6「百見は一動に如かず」

知っているのとやっているは大きく

な違い。スマホの電池と同様、充電と放電のバランスが大切。インプット偏重の評論家になるなかれ。

その7「まちの触媒たれ」

自治体職員に最も必要とされる役割は、新たな化学反応を引き出す触媒機能。人をつなぎ、スイッチを入れる黒子に徹すべし。

まちに関わる

以上、ずいぶんと偉そうに述べてきたが、つくづく自治体職員ほどチャレンジしやすい環境はないと思っている。よほどのことがない限り首にならない（今のところは）、あまり数字で評価されない（変わりつつあるが）、民間ではありえない圧倒的独占状態（市民は役所を選べない）という環境を逆手にとれば何でもできるはずだ。

そして私は、自治体職員ほど楽しい商売はないとも感じている。地域に関わると、まちも自分もどんどん好きになれるし、喜びを分かち合う喜びは最上のものだ。人に関心のなかった自分も、多くの人と出会い、随分と人間味のあふる大人になれた（気のせい？）。
伝えたかったのは、まちに関わるということがあるよ！ってこと。



本連載は「自治体改善マネジメント研究会」のメンバーが執筆しています。同研究会は自治体で改善運動を推進してきた職員と行政経営デザイナー元吉由紀子が共同で設立。実践事例情報を収集、分析し、ナレッジ化して情報発信している。2017年にNPO法人化。ホームページ、Facebook「自治体改善の輪」を運営。

第31回

まちづくりで学んだ 7つのこと

～自治体職員ほど楽しい商売はない

は、同質性の高い組織にどっぷりつかって閉じこもっていることに尽きる。だからこそ、意識して地域に飛び出すことが大切だ。
私の場合は、地域の人をつなぐことを目的としたNPOみしまびと

その後もイベントや仕事でのタッグから、果ては結婚に至るなど、仲間のつながりは深まっていった。現在は、幼稚園跡地をリノベーションした交流拠点「みしま未来研究室」で、共創の場づくりにチャ